



翻訳された川端康成『雪国』

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

今回川端康成『雪国』を取り上げたのは、今年の冬が雪が多いという理由ばかりではない。柳美里「JR上野駅公園口」が英語に翻訳されて全米図書賞を得たというニュースに触発されたからでもある。

『雪国』はロマンチックな小説で、読者が多い。バブルの最盛期の頃、東京の金持ち達にセカンド・ハウスを持つことが流行し、『雪国』の舞台である越後湯沢の宅地が売れたが、バブルが去るとその地が過疎になって市民は困惑した。私は東北大学文学部国文科卒であるが、ある先輩が秋田県の湯沢高校を越後の湯沢高校と勘違いして就職してしまった。しかし、彼は、秋田の湯沢高校で秋田美人と結婚し、秋田県の高校長として退職まで勤めた。

川端康成の『雪国』の冒頭は、誰でも知っている次のような一節で始まる。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように、
「駅長さあん、駅長さあん」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

その部分をサイデステッカーの翻訳『SNOW COUNTRY』によれば、次のごとくなる。

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

A girl who had been sitting on the other side of the car came over and opened the window in front of Shimamura .

川端の『雪国』の冒頭のトンネルを抜けて行く文には主語がない。しかし、『SNOW COUNTRY』には、「The train」という立派な主語がある。それは英語は、主語がなくては文にならないのだから当然であるが、私達にとっては、大きな汽車がトンネルを力強く通り抜けて行ったのでは、少しもロマンチックではない。大体、川端の時代には国境などはずでない。しかし、県境では昔の風情はない。翻訳者には国境は理解できないから、サイデステッカーの『SNOW COUNTRY』には、国境に類する単語はない。

川端が、ノーベル文学賞を受賞したのは、サイデステッカーの名訳があったからである。川端はノーベル文学賞の授賞式にも彼に同行してもらい、講演の通訳もお願いしてお礼として

賞金の半額を贈呈した。

しかし、日本人で英語の拙い私には、『SNOW COUNTRY』からは少しもロマンを感じるができない。

もう一度、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という日本文と「The train came out of the long tunnel into the snow country」という英文を比較すると、日本文の主語は、汽車に乗っている作者である。というのは「夜の底が白くなった」という文を考えれば、闇夜を感覚鋭く「夜の底」と感じるのは作者川端以外の何者でもないからである。「向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した」は「the other side of the car」と翻訳されているが、これでは島村から娘の顔は見えない。「立って来て」というのであるから、横の向側の席から島村に顔を見せ

ながらやって来て窓を開けたのである。

すなわち、作者はこの車に乗り込んだ視点で小説を書いているのである。そして読者の私達も島村を川端と想像しながら読んでいるのである。日本人特有の作家と主人公を同一人物としてしまう私小説的読み方で小説を読んでしまうのである。サイデンステッカーの視点はあくまで汽車の外からの視点である。

私達は、トルストイもシェイクスピアも翻訳で読んでおきながら、日本語が外国語に翻訳された小説を読むという立場が逆転すると翻訳では面白くないと言い出すのである。

海外で人気のある村上春樹、日本語とドイツ語の二カ国語で作品を書く多和田葉子が活躍する時代である。最近、外国人の日本文学研究者は多いが、日本人の国文学者が極端に少なくなってきた。

